

山に雪光る

小川未明

青空文庫

いろいろの店にまじって、一けんの筆屋がありました。おじいさんが、店先にすわって太い筆や、細い筆をつくっていました。でき上がった筆は、他へおろしうりにうるのもあれば、また自分の店において、お客へうるのもありました。昔とちがい、このごろは、鉛筆や万年筆をつかうことが多く、筆をつかうことはすくなかったのです。しかし、大きな字を書いたり、お習字をしたりするときは、筆をつかうのです。しかし、

武男は、よくおじいさんのところへ遊びにきて、お仕事をなさるそばで、おじいさんから、お話をきくのを楽しみました。

「おじいさん、あの字は、だれが書いたの。」と、頭の上にかかっている額をさしました。

「ああ、あれはここへみえる、書家の方が、お書きなされたのだ。」

「うまく、書けているの。」

「みなさんが、おほめなさる。山高水長、やまたかく、みずながし、といつてもよい

」。

「おじいさんに、書いてくださったの。」

「そうだ、ここにある、この筆で、お書きになったのだ。私のつくった筆が、たいそう書

きよいと喜ばれてな、一枚まいくださったのだよ。」

おじいさんは、箱はこの中から、一本ほん太い筆ふでをとりだして、いいました。それは、白しろい毛けの筆ふででありました。

「ぼく、お習しゅうじ字じのとき、つかう筆ふでとよくにているな。」と、武男たけおは、目めをまるくしました。

「武坊たけぼうのもよい筆ふでだが、これとはちがつている。」と、おじいさんは、笑わらわれました。

「ぼくのも白しろいね。この筆ふでの毛けは、やはり羊ひつじでない。」

「そう、羊ひつじの毛けだ。」

武男たけおは、筆ふでをつかつたあとで、かなだらいに、水みずをいれて洗あらうと、もくもくと、ちやうど汽車きしゃの煙けむりのように、まっ黒くろい墨すみを、筆ふでからはき出だします。そして、そのあとの毛けは、清きよらかな水みずをふくんで、美みしい緑みどりいろ色いろに見みえるのでした。

「おじいさん、どの毛けでつくつた筆ふでが、いちばんよいのですか。」と、武男たけおは、ききました。

「いちがいにいえぬが、細ほそ筆ふでなどは、たぬきの毛けだろうな。」

「どうやって、たぬきをつかまえるの。」

「たぬきか。おとしや、わなでつかまえたり、また、子飼こがいにして育てそだたりするのだ。」

「山やまへいけば、たくさん、獣物けものがすんでいるのだね。」と、武男たけおは、いいました。

「昔むかしは、このあたりでさえ、いたちが出たでものだ。」

おじいさんも、子供こどもの時分じぶんから、町まちに育そだつて、野生やせいの動物どうぶつを見る機会きかいは、少すくなかつたのです。

もう火ひばちに火ひのほしい、ある日ひのことでした。武男たけおが、おじいさんのところへいくと秋あきの薬くすり売りが、額がくの字じを見みながら、おじいさんと話はなをしていました。いつしか、字じの話はなしから、山やまの話はなしになつたらしいのです。

「なにしろ、中央ちゆうおう山脈さんみやくの中なかでも、黒姫くろひめは、陰阻けんそといわれまして、六、七月がつごろまで、雪ゆきがあります。やつと、草くさや木きの芽めが出ではじめると、薬くすりになるのばかり百種しゆほどつんで、ねり合あわせたのが、この薬くすりですから、腹ふく痛つうや、食しょくあたりなどによくききます。これをおいてまいりましょう。」と、薬くすり売りは、袋ふくろにはいつたのを、おじいさんの前まえへおきました。

おじいさんは、その袋ふくろを手にとつて、さもなつかしそうに、ながめながら、

「それから、さつきの話はなしの筆草ふでぐさというのを、こんどきなさるとき、わすれずに、見みせて

もらえまいかな。」といいました。

「来年の夏は、方々の山へまいります。私が見つけなければ、おちおうた行者に頼んで、どうかして、手に入れてまいります。」

「ふしぎですな、自然にそんな草があるとは。」

「てんぐや、隠者が、それで字を書いたといっています。」

「私は、この年で、もう高い山へ上れないから、たのしみに、待っていますよ。」と、おじいさんは、頼んでいました。

薬屋は、紺もめんの、大きなふろしきで四角な箱をつつみ、それを背中へ負い、足にきやはんをかけ、わらじばきの姿で、立ち去りました。武男は、しばらく、その後ろ姿を見送っていました。

「筆草って、草があるの。」

「高い山へ、薬草をさがしにいくと、まだ人の知らない、ふしぎな草があるという話だ。」

「あの薬屋さんは、これからどこへいくの。」

「まだ方々を歩いて年の暮れに、山国の町へ帰るといった。」

武男は、その日の夕暮れが、いつもより、美しく、さびしく感じられました。
 秋から冬へかけ、空は、青々と晴れていました。町のはずれへ出て、むこうを見ると、
 野や、森をこえて、はるかに山々の影が、うすくうき上がっていました。その中の高い
 頂には、すでに雪が、はがねのように光っています。武男は毎日ここへきて、山をなが
 めていました。そして、正月の書き初めには、「山に雪光る」と、書きました。
 よくできたと、学校の先生からも、お父さんからも、ほめられました。また、筆屋
 のおじいさんは、字に、たましいがはいっていると、たいへんほめてくれました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「心の芽」文寿堂出版株式会社

1948（昭和23）年10月

※表題は底本では、「山《やま》に雪《ゆき》光《ひか》る」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年1月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山に雪光る

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>